

○ 初めての出会い

松村禎三さんに初めてお会いしたのは、1964年の夏から秋にかけてのことでした。当時私は開場したばかりの日生劇場制作部に在籍していて10月公演の三島由紀夫作、浅利慶太演出、水谷八重子（先代）、津川雅彦主演の「恋の帆影」でプロデューサーの助手をしていました。当時の手帳を見ると7月26日、本読み（作家が台本を読んで聞かせる）、とあるので多分ここで松村さんに会っているのだと思います。松村さんの姿をはっきりと覚えているのは音楽録音です。10月3日の初日を前に、音楽録音は9月28日イイノホールで21時から深夜にかけておこなわれました。いまと違ってエコーをかけるのは簡単ではなく、松村さんは舞台と後部客席の上にあったエコールームを何度も何度も往復されていました。またこのとき初めてミュージカル・ソウに会い鋸が楽器になるのかとビックリしていたことを良く覚えています。

○ 日生劇場

日生劇場に在籍した1970年までにサルトル作「悪魔と神」（1965）、ラシーヌ作「アンドロマック」（1966）で一緒しました。「悪魔と神」には編成も大きくシンフォニックな音楽がつき、それはずっとこの芝居のために考えられたオリジナルなものだと思っていましたが、しばらくして発売された「交響曲」初演（1965）のLPを聞いて、それが逆であったことを知りました。

「悪魔と神」は神の不在を扱った実存哲学の作品で、尾上松緑さんが「神はいない！」と絶叫する場面の音楽は圧倒的でした。ですから、いまでも「交響曲」を聴くと松緑さんの演じたゲッツのイメージから浮かんで来て、純粋に音楽として聴くことを邪魔するのは困ったことでもあります。

「悪魔と神」ではオペラ「沈黙」と同様、神の沈黙を扱っていますが、この時にはまだ遠藤周作さんの「沈黙」は世に出てはいませんでした。

日生劇場では他に浅利さんの演出で「ハムレット」、「オセロ」、「オルフェとユリディス」がありました。

○ 無頼漢「松村禎三」

何の芝居であったか、浅利さんが演出した芝居の時、舞台稽古が始まってすぐ、せっかく作った大道具が「笑われる」（取っ払われる）ことがありました。あるスタッフが「あーあ、x十万円がパーか」と一言。その金額が作曲料より高かったことから、松村さんは怒って帰ってしまったことがありました。また、ある映画の音楽予算が極端に少なく不満を持って、全スタッフそろっての打ち合わせでプロデューサーに「必要な予算がないなら降りる！」と言って、慌てたプロデューサーがその場で増額を約束したことがありました。でも結局増額分は支払われず、東京コンサーツが被害を被ったこともありましたっけ。

松村さんの映画、芝居の音楽で一番困ったことは、「この場面にはどんな音楽がよいと思います？」とよく聞かれたことです。それも深夜、早朝に電話です。「それを考えるのが作曲家なのに！」なんて返事をしたら、多分担当を首になっていたでしょう。今となってはそうした電話がないことが寂しく思います。

○理想の映画音楽

松村さんは作品と付随音楽とは区別していて、付随音楽で実験してそれを作品に取り込むということは考えてはおられませんでした。映画音楽を頼まれた時にいつも言っていた「夢」がありました。それは「音楽 松村禎三」とタイトルにありながら、実際には音楽はなにもついていなくて、作曲料は保証されるというものです。実際フランス映画にそういうのがあったそうです。

これに近いことが最後に実現しました。黒木和雄監督の遺作ともなり、松村さんの最後の映画音楽となった「紙屋悦子の青春」です。監督と何度も打ち合わせを重ねてゆくうちにどんどんMナンバーが減ってゆき、とうとうこの映画の音楽は冒頭のタイトルとエンド・タイトルだけになりました。「劇中の音楽はなし」という結論になって、「夢」が実現した時の松村さんの顔は忘れられません。